



一番星

長良英明

気づくところまで足を運んでいた。名前はあるんだろうけれど、正確にはわからない。どこでもない場所、たとえば大げさかもしれないけれど、僕にとってはそういう場所なのかもしれない。現実なんだけれど、どこか非日常を象徴しているような、そんなところ。

そう大きくない河川敷の階段に座る。平日の夕方にあまり人はおらず、たまに犬の散歩をしている人がいるくらいだった。

そのミニチュアダックスが寄って来た。

「おっ？ どうした？」

悲しそうな顔でもして、慰めてくれようとしたんだろうか。

「すみません！ ほら、駄目だよ！」

飼い主は高校生くらいの女の子みたいだ。

「あー、いいよいいよ。暇だし、嫌いじゃないし」

「すみません、この子は若い男の人を見ると、遊んでくれって寄っていくんです。もうお爺ちゃんなのに」

「へー」

気持ちは若いんだな。

「何歳なの？」

「十三歳です。小型犬だと長生きな方ですね」

僕もかれこれ二十年も生きた。そりゃ、まだまだこれからなんだろう、と思う。でも、これだけ生きれば僕にだって色々な感慨が生まれる。振り返るにはまだ早いかもしれない。別に何かに勝利した訳でもないけれど、ちょっと感傷に浸る時間くらいあってもいいんじゃないかな。

「よし、走ろうか？」

こちらを見ながら目をキラキラとさせる、ミニチュアダックス。

「あ、駄目です。腰も悪いので、あんまり速く走らせると……」

「やめよう！」

「あはは！」

「もしかして遊べないのかな？」

「そうですね、もうこれという遊びは……」

「残念だな」

心の底からそう思った。

代わりにダックスの頭を撫でる。

「長生きしろよ」

嬉しそうな表情をしているように見える。

「ありがとうございます」

飼い主さんにお礼まで言われてしまった。

僕は挫折して間もない。交通事故で足を怪我してしまった。切断するとまではいかなかったけれど、スプリンターとしての選手生命を奪われるには十分過ぎた。

もちろん今までだって挫折していない訳じゃない。まず黒人に生まれたかったし、高校生の間に結果を出したかったし、大学受験も失敗した。こう思うと色んなことが残念でしょうがない。ネガティブに考えると生きる希望さえ失いそうだ。でも、今までの僕は走ることができた。ランナーズハイのおかげかもしれないが、走っている時は全てを忘れることができた。これまでの辛かったことも、これから起こるかもしれない辛いことも、全てどうでもよくなって前に進むことができた。それは比喻でもある。やはり走っている時間があれば僕は前向きに進むことができたんだ。

わかっていて。わかりきっていた。失ってみて悟った。もう僕は進むことさえできないかもしれない。グラウンドに横たわったまま、死ぬのかもしれない。

「あ、あの……」

「え、はい？」

飼い主の女の子が話しかけてきた。まだいたんだ。

「たまにここにいらっしやいますよね？」

「そうだねえ……」

月に数回くらいだと思っただけだな。

「私たちは毎日同じ時間に散歩に行くので、時間帯が合う人のことは覚えちゃうんです」

「なるほど」

「それで、ですね、……先輩」

「……先輩？」

「あ、やっぱりわからないですか？ 中学の時に一つ下の学年だったんですけど……」

そう言われて、脳内の顔データをハイスピードで照合する。

見覚えはある。

え、でも、こんなに可愛かったっけ？

「あ、放送部の部長をやっていた……」

「そうです！ 覚えていて下さって嬉しいです！」

「あ、うん……」

「うふふ、実は誰にも話したことがないんですけど、先輩は私のスターなんですよ」

「スター？ 星？」

「そうです。それはもうとびっきりの一番星です」

「へ、へえ、そうなんだ」

そんな風に言われたのは初めてだ。

嬉しいような恥ずかしいような。でも、沈んだ気分が浮かぶほどじゃなかった。

私は放送部だったので放送室にいたことが多かったんです。窓の外はちょうど陸上部の練習が見える場所でした。年頃の女の子でしたし、誰がタイプか、とか、よく話していたんです。あ、最初は先輩がタイプだった訳じゃないんです。ほら、一番後輩から人気のあったあの人ですよ。あの方が好きでした。練習もそんなにしないのに凄く足も速いし、とっつても素敵だと思っていました。親友がこっぴどくフラれるまでは、ですね。

先輩って背が低かったじゃないですか。それが二年生の冬くらいになって急激に伸びましたよね。はい、はっきり覚えています。私が好きになったのはその頃なんですから。

最初は皆が口を揃えて言っていたんですよ。小さいし、そんなに練習しても駄目じゃないの、って。よく考えると酷いですよね。本人に言わなくても、そんなこと言っているなんて今でも最低だと思います。

でも、先輩は背が伸びるにつれてどんどん速くなっていくのがわかりました。まるで今までの練習でため込んだ力が全て溢れ出てくるみたいに。見た目もかっこよくなりました。今でも痩せていてその悟ったような目が素敵です。極め付けは体育祭の時のリレーでした。ぶっちぎりの優勝だったことを覚えていますか？

確かに中学生の遊びだったかもしれませんが、私の心を掴むには十分過ぎました。

私は先輩を見て思ったんです。

頑張った人が報われることもあるんだ、って。

それから、私は色んなことを頑張りました。

先輩は今でも、私の一番星なんです。

後輩は照れ笑いを浮かべていた。

「長々とすみません。言いたかったことを全部言ってしまいました。なぜなのでしょうね」
恥ずかしがって俯く姿も可愛らしい。

「ありがとう……そうだな、彼も走れないんだったよね」

「え？ はい、そうですね」

「いや、実は俺も、まあ、走れない訳じゃないんだけど、もうああやって走ることはできなくなっただ。怪我でね」

「えっ……」

「あ、気を使ってくれなくて大丈夫だよ。君の話は嬉しかったから」

「あ、すみません……」

「いや、本当に！ だってさ！！」

「は、はい」

「まだ歩けるから」

僕はこの時、自分がどんな顔をしていたのかよくわからなかった。

でも、後輩が浮かべた花のような満面の笑みが、鏡だったような気がする。

続けて言う。

「良かったら、一緒に歩こう」

「はい」

返事は即答だった。

僕はもう昔のように走ることができない。これは多分死ぬまで変えられないことだ。でも、こうやって誰かと一緒に歩くことはできる。

もし、歩けなくなったら、這ってでも進もう。

もし、這うこともできなくなったとしても、前を見据えよう。

何があっても、前へ進もう。